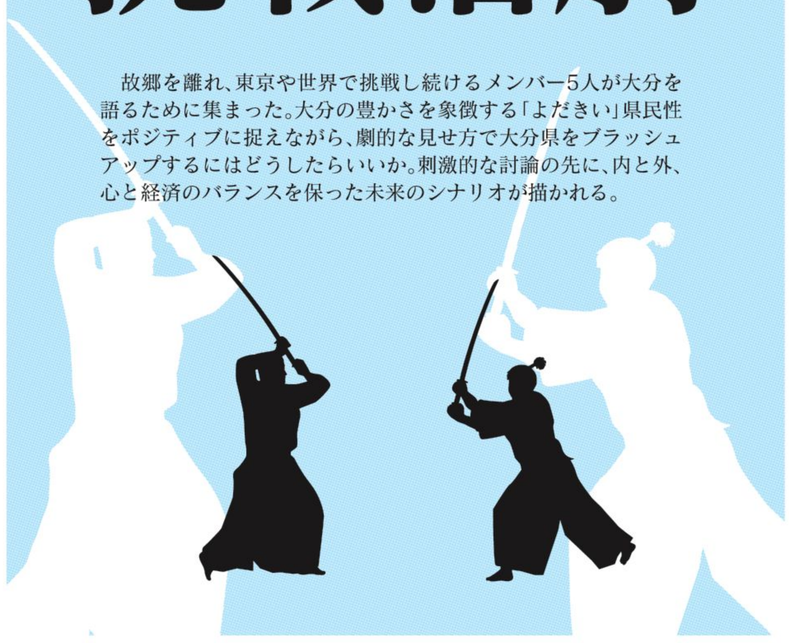
ハピカム ミライデザイン会議

東京編

挑戦活劇

故郷を離れ、東京や世界で挑戦し続けるメンバー5人が大分を語るために集まった。大分の豊かさを象徴する「よだきい」県民性をポジティブに捉えながら、劇的な見せ方で大分県をブラッシュアップするにはどうしたらいいか。刺激的な討論の先に、内と外、心と経済のバランスを保った未来のシナリオが描かれる。



「よだきい」は豊かさの象徴

コンプレックスが力に

直野　今回は東京を起点に活躍する方に集まっていただきました。自己紹介と併せて、大分時代はどんな子どもだったか教えてください。

赤松　生業はヘアメークです。主に広告や雑誌などの分野で活動しています。中学まで日出町でしたので、城下町の日出で眺める景色や自然が、豊かなものを育ててくれたのかなと思います。

平川　テレビや映画で監督をしています。出身は大分市。貧乏だったのでコンプレックスしかなかったけれど、それが今の原動力になっている気がします。

古城　大分市内で育ちました。新聞配達をして中学でギターを買い、今に至っています。

河野　大分雄城台高校出身です。アマチュア無線が趣味で四国の人と交信するような青年でした。大学を卒業して伊藤忠商事に入り、起業のために退社。2005年に会社を興し、「もったいないものをお金に変えたい」をコンセプトに六本木で貸し会議室を始めました。今はホテルの宴会場や海外にも事業を広げています。

中津留　TRASHMASTERSという劇団を旗揚げし、14年目です。津久見で育ったので海とたわむれていた思い出が大きいです。大学は建築学科。俳優を目指した時期もあったりしましたが、結局物書きになりました。

大分で培った商売根性

直野　当時、今の自分を想像していましたか。

平川　全然。東京に住むなんて思ってなかったです。思春期の高校時代に映画や音楽など文化に触れ、感動させる仕事がしたいと思ったときに、大分にはいられなかったんですね。

河野　中学校までは定まっていなかったですね。たまたま東京だったということ。東京で頑張って、失敗したら大分に帰ればいいかと。気付いたら大分を出て22年たちました。

赤松　子どものころからファッションやビューティーに関わる仕事をしたいと思っていたので、中心地に行きたいと思っていました。

古城　曲を作るのが好きでしたが、プロとか考えられなかったです。親のプレッシャーもあって広島の大学に行きました。

直野　平川さんはなぜ映像の仕事に？

平川　ドラマが好きだったから。当時は大分にテレビ局が2局しかなかったからですね。大分の人って少なからずコンプレックスがあると思う。威張って大分出身って言えない後ろめたさというか。大分弁とかすごくかわいいのに。今回こういう場をつくって、変えていこうという取り組みはすごいと思います。

演出家、映画監督
平川雄一朗 さん

河野　僕の場合、祖父が大分で事業をしていたのが大きいです。大分で培われた商売根性が役立っているのかなと思います。

赤松　私は中学で離れているので、郷土への愛情が育ったのかも。胸を張って言っていくタイプです。仕事でもNHKの「風のハルカ」とか、映画「釣りバカ日誌」の撮影が佐伯であった時に声を掛けてもらって。大分を発信することが私にとってはプラスになっています。

直野　古城さんは大分を愛していますか。

古城　以前は「九州出身」と言ってました。でも、新聞に載った時、地元の友達が今までと変わらない感じで「頑張ってるな」と言ってくれて。環境とか友達とかに触れて、最近は大分でよかったなと感じるようになりました。

中津留　大分の人は控えめなのかな。僕は負い目を感じることってないですけれど。「九州のどこにあるんだ」とかは他県にもあると思う。

河野　最初のころは何も分からない。でも、頑張って実力を付けてから、自分の出身地に誇りを持てるようになってきました。

何度も辞めようと思う

直野　ところで皆さん、たくさん失敗や挫折もされているかと。

平川　失敗談…出せるのあるかなぁ（笑）。

古城　僕の場合、厳しい時代が10年くらい続きました。大学卒業の時、親父に「勝手にしろ」と言われ、下手に帰れないというか、そういう気持ちもありました。

中津留　僕も何度も辞めようと思いました。でも、次で辞めようと思うと、大分の方言を使って芝居を書きたくなることがあって。大分弁の作品が3本くらいはあると思います。

劇作家、脚本家、演出家
中津留章仁 さん

直野　原点に帰るという感じですかね。河野さんはいつでも帰れるから頑張ってみようとおっしゃっていましたが。

河野　裏返しの表現ですね。帰るのは最終手段ですから。リーマンショックと震災の時は僕もかなりやばかった。年商100億でもお金が入ってこなくなったら財務力があってももたない。震災の時はたまたま九州にいて、大分に4、5日いたんです。会社を大きくしたけれどなくなってしまうこともあると震災で実感しました。そんなとき、大分の風景を見て原点に帰れました。いつでも帰れるという思いが東京で頑張る原動力になっています。

メンタル含めて変化を

直野　赤松さんから見た大分の印象は。

赤松　変わろうとしているところは感じるんですが、変わり方が上手ではないというか、発信力をもたらすほどのいい変化になっていないと感じます。

平川　大分に帰るたびに悲しくなるのは、大分駅前の寂しさ。僕らがいたときはよかったのかもしれないけれど、空洞化している。

中津留　例えば、東京都豊島区ではお祭りが多くてお金を落としているという話があります。イベントを継続的にすると人が集まってお金が落ちる。大分の祭りをプロデュースしたらどうですか。

平川　熊本の祭りに行ったんですが、若者がすごく盛り上がってた。大分は熱さがないというか。控えめ。好きなんだけど、思いを出さない気がします。どこかで負けているという部分があるのでは。自信を持ってもっと出したらいいのにな。

中津留　人を変えていかないといけないのかも。メンタルを含めて変わることが必要なのでは。

やれることでアピール

直野　控えめな大分県人が東京で挑戦されているわけですが、どうやって克服したんですか。

古城　仕事の中では相手が求める曲をつくるのはもちろんですが、過激な提案も含めて3曲くらい準備します。自分のキャラを売るのではなく、やれることでアピールしていくということはしています。

平川　基本、県民性というとみんな「よだきい」んだと思う。よだきいし、満たされている。前に進むためには寒い思いも必要ですから。

中津留　ソウル（魂）が「よだきい」んでしょうね。経済面だけじゃなくて、東京生まれの人より大分は満たされていて人間的には豊かかもしれない。

平川　変に変わらないでほしいという思いもするんですよね。

中津留　よだきいという思いをポジティブに捉えられないかな。大分の魂というか「僕たちの感じ」ができたら、じんわりやっていけるのでは。大分の誇りにポイントがあるような気がします。よだきいって素敵な考え方ですよとプレゼンしていくとか。

赤松　大分ってポテンシャルが高いと思う。でも発信する力と現代に添う力がなかなか育っていないと思うんです。育てる意味でも県内外での双方の取り組みが必要。欲しいと思うものに変えていけたら、独自のあか抜け方ができる。持っているポテンシャルを広げる取り組みを東京チームはしなくちゃ。

esper.代表取締役
赤松絵利 さん

河野　何もやらなくても安定しているところは崩さないと前にいかないから、外にいったん出ることも大切かと思います。話は変わりますが、インバウンド（外国人旅行者）の増加は日本より韓国が多いんです。先日、大分からソウルに行ったんですがガラガラでした。大分―ソウル便を活用して、大分＝日本というストーリーをつくるチャンスだと思います。

ティーケービー代表取締役社長
河野貴輝 さん

クリエーター巻き込む

直野　東京チームの役割という話が出ました。東京から大分にフィードバックができることはありますか。

赤松　仕事柄、いろんなジャンルのクリエーターとつながれるのは大きい。バイパスになって、そういう人を巻き込むのはできるかな。

直野　平川さんはどうですか。

平川　自分がやっていることが大分の自信になればいいなと。僕は大分合同新聞の「読者の声」に投稿するくらい大分が好きなので、ポジティブに大分を認めて、本物を見極めてほしいなと思います。

作曲家
古城康行 さん

古城　やる気があって才能がある子を逃さないためにも、僕の役目としては実力をつけて名前を残して、大分でやっていたら俺とつながれるという希望の一つになれればと思います。

中津留　世界で一番演劇をしているのは東京。演劇は実際足を運ばないと見られないので、僕には東京という場所がよかった。今、地方の劇団のプロデュースをやってみたいと思っています。大分のぶんご・ふない座（仮）も友達が脚本を書いています。

河野　競争に勝てるものではないといけないと思います。大分の本物の資産は農業であり、工業であり、観光。主体的に自分たちで動かせるかという点では農業と温泉です。本来のマーケットがありますし、本物を見極めて民間とマッチしてやっていかなくては。

物語付け遊休資産活用

直野　フィードバックについては。

河野　大分県にある遊休資産にストーリー性を持たせて活用したい。ストーリーと資源の見せ方は平川さんの世界では。アジアの人に向けた映画作りの中に郷土を入れるのはできると思います。

直野　見せ方を変えるということですね。

平川　大分という県で競争がおきているのかな。競争が起きる場所であればもっと魅力的であるはず。やっぱり人です。どこかで「よだきい」、「自信がない」から、「これでいいよ」となる。ふたをされるような閉塞感があると思う。変化を求めないと見せ方も上っ面だけになっちゃう。本物を見極めるのは個人の力です。

赤松　ある企業の包装紙が象徴的。コントラストを付けすぎて影が深いし、伝わらない。コンセプトは間違えてないけれど、見せ方にうまさがない。おしいなと思います。コンセプトと結果がマッチしてないのでは。そういうところに私たちの知恵が入っていくことで、見た人に伝わることがあるのではと思います。

直野　具体的には。

赤松　ワークショップのようなものはどうですか。大分で一緒に何かをするといったきっかけを積み重ねて、県外へいく波を立てる。

中津留　ビジネスのラインをしっかりトータルでデザインしないといけないと思うんですが、それはわれわれができることかも。

河野　大分も個人資産は持っているわけですよね。アベノミクスと同じでいかに金が回るようにするか、大分ならではの政策があるはずです。

赤松　没個性にならないように各市町村の個性と売り出しの見極め方を探ると、もっとよくなるのではないでしょうか。

河野　劇的に変わる部分も必要です。インフラが大きいですね。大分空港のLCC（格安航空会社）は劇的。空港をうまく使えば、アジア、東京とつながります。

中津留　福岡空港のキャパシティーが満杯なのに大分は旅客を取りにいかないと。そこ、重要です。

河野　大分の場合、飛行機しかないので、新幹線より安ければ逆に魅力的ですよね。

うらやましい部分ある

直野　自信を持つにはどうしたら。

中津留　人、ですね。大分は食べ物とか全国でもトップレベルですよ。でも、普段食べている大分の人は気付かない。

河野　日本一をつくっていかないと。カボスに甘んじちゃいけない。知名度を上げて、特色をいかに出していくかということですよね。

直野　自信を持てという話ですが、ふたを外すには何が足りないんですかね。

平川　今の日本の状態なんだろうな。余裕が持てないというか。自分の心にもふたをしている気がします。どこかにある引け目を打ち破る力は、自分の中が満たされれば開いていくんじゃないかな。

古城　僕自身ができることって、大分の人間が自信を持ってこちらでやっているということかな。自分もできるかもと可能性を感じてもらえるように頑張るしかない。

赤松　自信がないことを気付かせてあげることも大切なことですよね。

直野　どうしたら大分の人は自信がないことに気付きますか。

赤松　いかに外からの声を聞く機会を増やせるか。でも、気持ちは豊かなものを持っているけれど、バランスをどう取るかという問題ですよね。

直野　平川さんは作品から大分に伝えたいことはありますか。

平川　映画監督とは大衆に向けて映画を発信するもので、僕はそこに居続けるために闘っているので。ただ、大分が好きで、大分から映画の世界に入った人がいて、「頑張ればそこまでいけるんだ」と大分の人に思ってもらえるようにしたいです。

直野　人が人の励みになるということですね。

平川　郷土は内にあるものだから。自分が育ってきた、感じてきたものからでしか新しいものは生まれません。根底にあるのは古里なんですね。ぬぐえないものなんです。

中津留　確かに、そういう価値観がものを判断する礎になっている部分はありますね。高校生まで津久見にいて、それまでに養ってきたものの感覚とか、染み付いています。

直野　古城さんもそういう部分はありますか。

古城　僕の曲は物寂しげな感じになるとよく言われます。それは夕方学校帰りに青い影が伸びている感じといった原風景があるように思います。

平川　昔見てきた空や夕日は根底にあります。帰ってくるとやっぱりいとおしいし、毎日触れられている大分の人がうらやましくもあるんです。

古城　星もきれいだし、空気も水も違います。

頑張っている姿が励み

直野　大分県民から見ると、皆さんが最前線で頑張っている姿が励みになり、あこがれが原動力になると思います。

中津留　身近な人のサクセスをみんなで応援するような何かができないですかね。

直野　今回の取り組みもそうですよね。これだけのメンバーが東京で頑張っているんだという。

平川　よだきい祭りとか。よだきい人だけ集まる、みたいな。

河野　祭りをするときは県外向けかどうか、決めた方がいいですね。県外の人には案内する人がいないので、楽しめるように指定席を用意するといいのでは。

コーディネーター
大分合同新聞記者
直野 誠

直野　案内がうまくいくと、もっと大分に来る人が増えるかもしれませんね。

中津留　県外から人を集める仕組みは必要です。

直野　そろそろ時間になりました。活発な議論、ありがとうございました。

日本の森の、未来のために。「国産材100%※」へ。

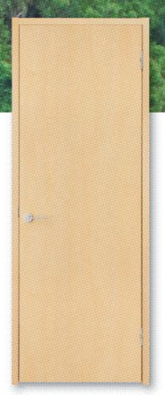
日本製紙社有林（宮崎県）　PAL

パルは内装建材で、国の定める「森林・林業再生プラン」を応援します。

伐期（生長し伐採されるべき時期）を迎えている日本の樹木を適切に利用することで、森林を整備し、二酸化炭素の吸収にもつながります。
「森林・林業再生プラン」では『木材自給率を2020年までに20%から50%へ』という目標が掲げられており、パルは内装建材でその目標を応援していきます。

国産材でつくる森のサイクル　木づかいニッポン　A-(1)-060017

国産材100%　木質部

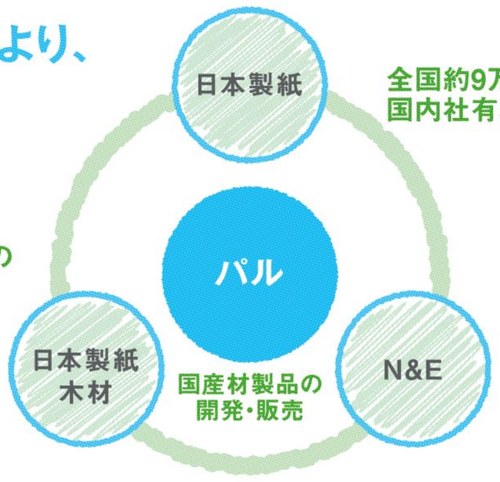


木と共に歩んできた日本製紙グループだからできた、業界初「国産材100%※」のフラッシュドア。

「フラッシュドア・クローゼット」および「複合フローリング」の木質部について、国産材100%※を実現しました。

※国産材100%の根拠は次の通りです。1.原木の山元、製材所、当社工場等の一連の流れの中で、合法木材等の証明の連鎖を確保しています。（林野庁「木材・木材製品の合法性、持続可能性の証明のためのガイドライン」に拠る）　2.工場における材料の分別管理等ルールに基づき教育及び運用を実施しています。

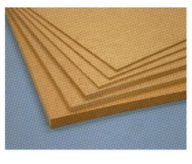
グループシナジーにより、国産材100%の商品を開発



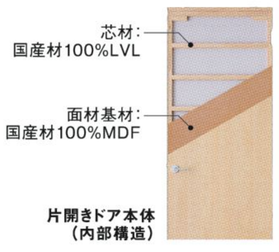
全国約9万haの国内社有林の管理

国内トップクラスの国産材の調達

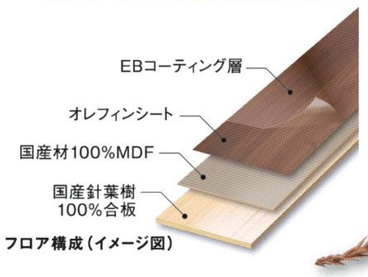
創業時から取り組む国産材のMDF生産



スペースパレット 国産材100（ドア・クローゼット）



レアルフィット エコ 国産材100



フロア構成（イメージ図）

日本製紙グループは、木を通じて豊かな暮らしをお届けします。

お問い合わせ先　株式会社パル　品質保証部　安全・環境室（担当：山川）
TEL：03-5256-9802　FAX：03-5256-9811　MAIL：info@pal-g.co.jp

人・くらし・人 PAL　日本製紙グループ　株式会社パル　http://www.pal-g.co.jp